

飯倉 A 遺跡 2

－第2次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第921集

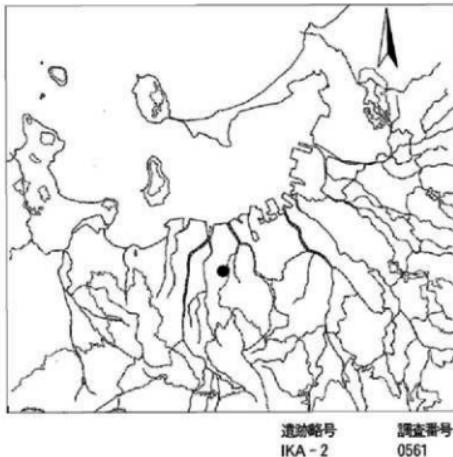
2007

福岡市教育委員会

飯倉 A 遺跡 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第921集



2007

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が盛んで、人間の活動の痕跡は福岡市域に残る多くの遺跡に見られます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、共同住宅建築工事に伴い調査を実施した飯倉 A 遺跡第 2 次調査の内容について報告するものです。今回の調査では平安時代の掘立柱建物群を始め、多くの遺構・遺物が出土しました。これらは古代における飯倉丘陵周辺の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで多くのご協力を賜りました立川順一様・株式会社タチカワをはじめとする関係者の方々に対し、心から謝意を表します。

平成 19 年 3 月 30 日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅新築工事に伴い、福岡市早良区飯倉 5-191-1において実施した
飯倉 A 遺跡第2次発掘調査の報告書である。
2. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	0561		遺 蹤 略 号	IKA-2	
地 番	福岡市早良区飯倉 5-191-1		分布地図番号	No073 茶山	
開 発 面 積	520.71m ²	調査対象面積	225.9m ²	調査面積	235.6m ²
調 査 期 間	平成18年1月13日～2月17日				

3. 本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。
4. 本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。
5. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
6. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
7. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より 6° 40' 西偏する。
8. 遺構の呼称は獨立柱建物を SB、溝を SD、土壙を SK、炉跡を SR、ピットを SP と略称し、遺構
番号は遺構種別にかかわらず通し番号とした。
9. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の記録	
1. 調査概要	5
2. 造構と遺物	6
① 堀立柱建物 (SB)	6
② 津 (SD)	10
③ 土壙 (SK)	10
④ 炉跡 (SR)	11
⑤ ピット・調査区壁面出土の遺物	11
⑥ 整地層および遺物包含層	12
第4章 まとめ	14

挿図目次

Fig.1	飯倉A遺跡とその周辺の遺跡 (1 / 25000)	2
Fig.2	調査区位置図 (1 / 1000)	3
Fig.3	調査区全体図 (1 / 100)	4
Fig.4	調査区南壁土層断面実測図 (1 / 40)	5
Fig.5	SB101 実測図 (1 / 60)	6
Fig.6	SB100・102・103・105 実測図 (1 / 60)	7
Fig.7	SB104 実測図 (1 / 60)	8
Fig.8	掘立柱建物出土遺物実測図 (1 / 3)	8
Fig.9	SD04・39 実測図 (1 / 60)	9
Fig.10	SD39 土層断面実測図 (1 / 20)	9
Fig.11	溝出土遺物実測図 (1 / 3)	9
Fig.12	SK84 実測図 (1 / 20)	10
Fig.13	SK84 出土弥生土器実測図 (1 / 3)	10
Fig.14	SR92・93・94 実測図 (1 / 60)	11
Fig.15	ピット・調査区壁面出土遺物実測図 (1 / 3)	11
Fig.16	整地層出土遺物実測図 (1 / 3)	12
Fig.17	遺物包含層出土石器実測図 (1 / 3)	12
Fig.18	遺物包含層出土弥生土器実測図 (1 / 3)	13

図版目次

PL.1	1. 調査前状況 (東より) 2. 作業状況 (東より) 3. 調査区全景 (東より)
PL.2	1. 整地・遺物包含層除去後全景 (東より) 2. 調査区南壁土層断面 (北より) 3. 掘立柱建物 SB101・102・103・105 (東より)
PL.3	1. 掘立柱建物 SB100・104 (東より) 2. 溝 SD39 土層断面 (西より) 3. 土壌 SK84 (南より)
PL.4	1. 炉跡 SR93 (南より) 2. 炉跡 SR94 (南より) 3. SR93 土層断面 (西より)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第1課、以下、埋文課）は、2005（平成17）年10月26日付で立川順一氏から早良区飯倉5-191-1他における共同住宅新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を受けた。埋文課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である飯倉A遺跡の推定範囲に含まれていることを確認し、工事予定地で平成17年12月12日に試掘調査を実施した。この試掘調査において遺構・遺物の存在が確認されたため、この成果を元に両者で協議を行ったところ、工事によって遺構の破壊は免れないため、建物建設部分について本調査を実施することとした。その後、委託契約を締結し、平成18年1月13日から発掘調査、翌平成18年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

2. 調査体制

調査委託：立川順一

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現・埋蔵文化財第2課）

調査統括：埋蔵文化財課長 山口謙治（現・埋蔵文化財第1課長）

埋蔵文化財第2課長 力武卓治

埋蔵文化財課調査第1係長 山崎龍雄（現・埋蔵文化財第1課調査係長）

埋蔵文化財第2課調査第1係長 池崎謙二

調査庶務：文化財管理課 後藤泰子

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長 漢石哲也

同係主任文化財主事 吉留秀敏

同係文化財主事 松浦一之介

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 阿部泰之

調査作業：田原忠昭 壱筋子 梅野真澄 松本順子 三谷朗子 徳永洋二郎 神原堅 安河内史郎

阿比留忠義 須佐恵司 栗木昭孝

整理作業：庄田慧 黒早苗 松田順子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで立川順一様・株式会社タチカラワ様をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を賜りました。ここに記して深く感謝の意を表します。

第2章 位置と環境

現在の行政区では横岡市早良区・城南区に当たる早良平野は、背振山系から西方に派生する西山・飯盛山・叶岳に南から西を限られ、東は油山から北に派生する低丘陵に囲まれる平野である。この平野は主に室見川とその支流によって開拓された冲積平野で、現在は北部から幹線道路沿いに市街地化が進んでいるが、旧来広大な水田地帯であった。先に述べた油山から北に派生する低丘陵の一つに飯倉丘陵と呼称される丘陵がある。これは第三紀層の扇状地性堆積物が浸食されたのち残った残丘で、調査地周辺の基盤層は黄褐色を呈する砂礫層である。

飯倉 A 遺跡は、この低丘陵上に位置する遺跡である。

飯倉 A 遺跡が位置する飯倉丘陵には油山山麓に至るまで遺跡が分布し、現在では飯倉 A ~ H 遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されている。これらの遺跡群は、弥生時代から古代にわたる造構が検出される複合遺跡である。先土器時代の遺物の出土が報告されるが、造構に伴うものではない。以下、各時代ごとに特筆すべき造構・遺物について概観する。

弥生時代は、飯倉 G 遺跡で中期後半とされる環濠が検出されている。遺物としては飯倉 D 遺跡において後期の住居址から小形彷彿鏡・銅矛鉄型が、飯倉 C 遺跡第 2 次調査で甕棺墓から銅劍・素環頭鉄刀が出土している。

古墳時代は、飯倉 B・F 遺跡で後期の堅穴住居が検出されている。

古代以降の造構・遺物は頗著でないが、丘陵の落ち際に鉄滓が散布する地点があり、丘陵上に製鉄関連の遺構の存在が予想される。



Fig.1 飯倉A遺跡とその周辺の遺跡 (1 / 25,000)

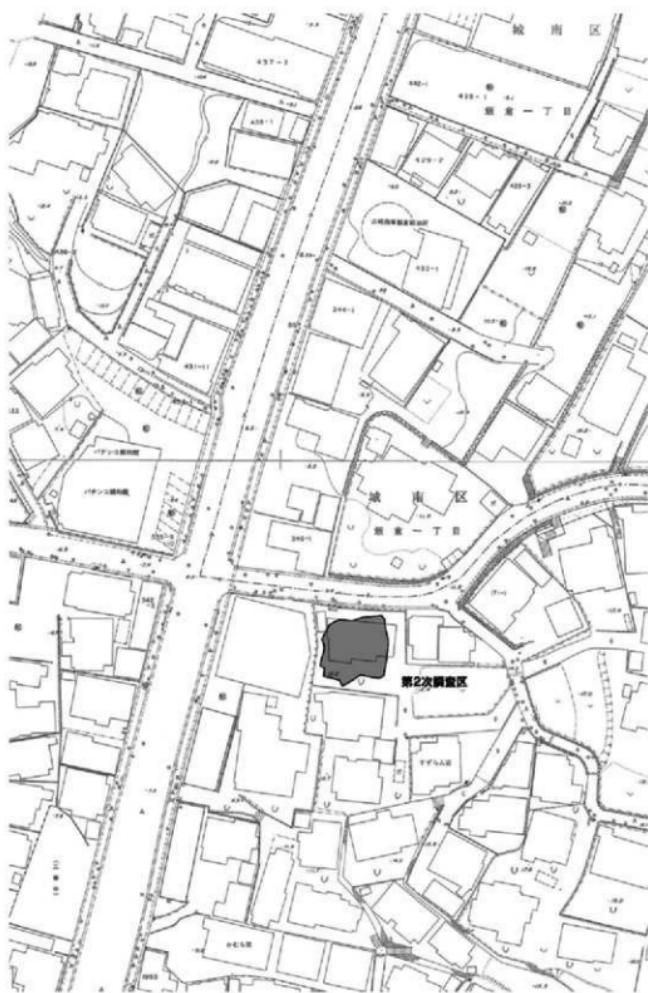


Fig.2 調査区位置図 (1 / 1000)

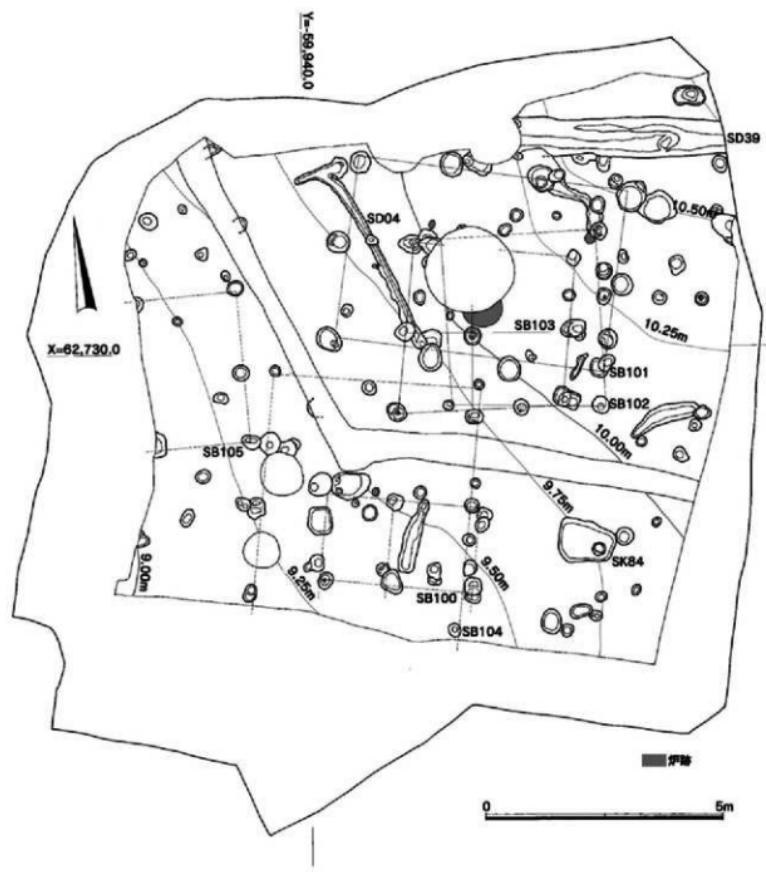


Fig.3 調査区全体図 (1 / 100)

第3章 調査の記録

1. 調査概要

本調査区は、早良平野と福岡平野を分ける飯倉丘陵の西麓に位置する。

調査区の層序を Fig.4 に示す。表土下の第1層は中世以降の堆積層である。均質で人為的な盛り土と推測される。第2層はそれ以前の表土層、第3層～第6層は平安時代の堆積層である。この層群は厚さ 0.3 ～ 0.4m を測り、一つの層の中でも複数の細かく水平な単位が観察できるほか、第3層には段状の落ち込みがみられる。これらの事実から人為的な整地層と判断した。掘立柱建物を含む古代の遺構は第3層上面から掘り込まれていると推測されるが、この面での遺構検出は至難であり、現場の状況・予算的制約から整地前の表土層と推測される第7層までを掘り下げ、弥生時代後期中葉～後半頃の遺物を含む第8層上面で遺構検出を行った。この層はうすい細砂層を挟み、堆積する間に斜面に水が走った時期があると推測される。現地表面下約 2.1m、標高 9.2 ～ 9.4m で基盤層である黄褐色砂礫層となる。基盤層が北東～南西方向に傾斜するため、包含層は南西に向かって低く厚く堆積する。なお調査区北部は削平のためか表土直下で基盤層が露出し、整地層・包含層ともに検出されなかった。

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物 6 棟、推定炉跡 3、溝 2 条、ピットである。いずれも遺物包含層を切る。弥生時代後期中葉～後半頃の遺物を含む遺物包含層より古い時期となる遺構は検出できなかつた。整地層は複数の層からなり、整地を繰り返しながら掘立柱建物を建て替えたと推測される。建物は 2 間 × 2 間または 2 間 × 3 間で、いずれも整地層を切って構築されている。3 棟切り合ひなど重複が多い。平安時代の掘立柱建物群と推測される。炉跡とみられる被熱部は掘立柱建物と重複して検出される。今回の調査で出土した遺物はコンテナケース 18 箱を数える。整地層から越州窯系青磁碗、黒色土器、柱穴から須恵器壺、土師器、包含層から弥生土器、今山系の玄武岩を石材とする磨製石斧が出土した。

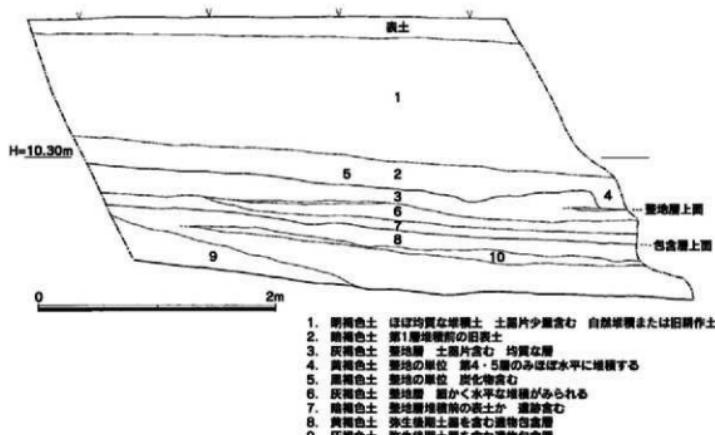


Fig.4 調査区南壁土層断面実測図 (1 / 40)

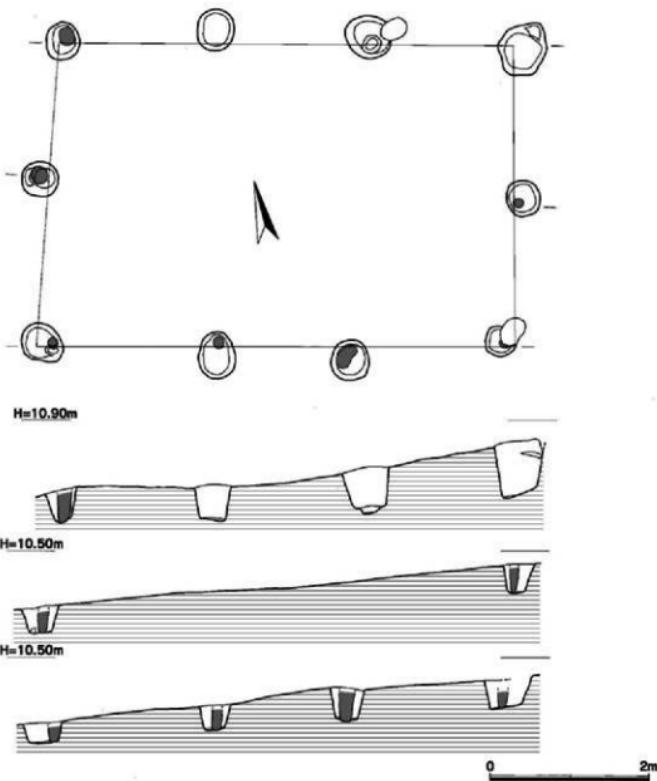


Fig.5 SB101 実測図 (1 / 60)

2. 遺構と遺物

① 桿立柱建物 (SB)

SB100 (Fig.6) 調査区南部にて検出した。SB104 と重複する。1間×2間とするには建物の規模が小さく、さらに南方に柱筋が伸びると推定される。柱穴の平面形は径約 0.3 ~ 0.5m を測る不整な円形を呈し、深さは 0.1 ~ 0.2m と浅い。これは整地層除去後に柱穴を検出したためで、本来はさらに深かったと推測される。遺物は弥生土器の小片が出土した。

SB101 (Fig.5) 調査区北部にて検出した。SB102・103 と重複し、東西方向に長軸を持つ 2間×3間の側柱建物である。柱穴の平面形は径約 0.4 ~ 0.6m を測る不整な円形を呈し、深さは 0.7 ~ 0.25m と西側ほど深い。これは整地層除去後に柱穴を検出したためで、本来はさらに深かったと推測される。柱痕跡は 7 基の柱穴で検出でき、柱間は 1.7 ~ 2.1m を測る。

出土遺物 (Fig.8) 1・8 は土師器、それ以外の遺物は須恵器である。1 は甌の口縁部で、小片のため

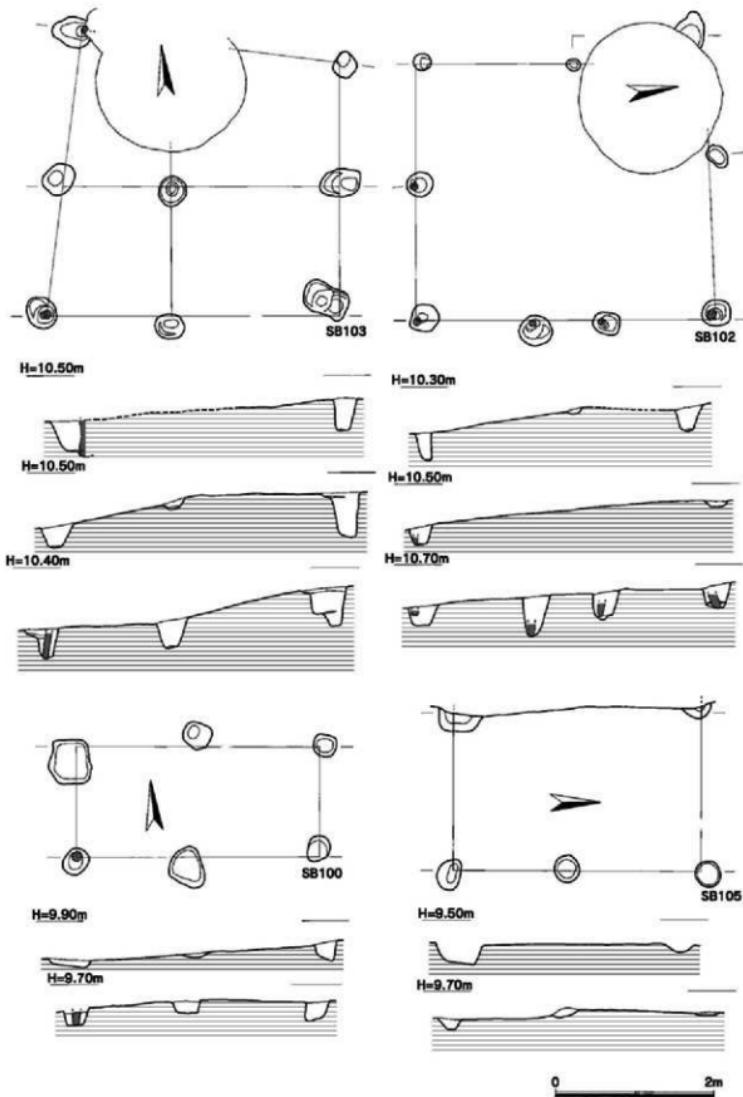


Fig. 6 SB100・102・103・105 実測図 (1 / 60)

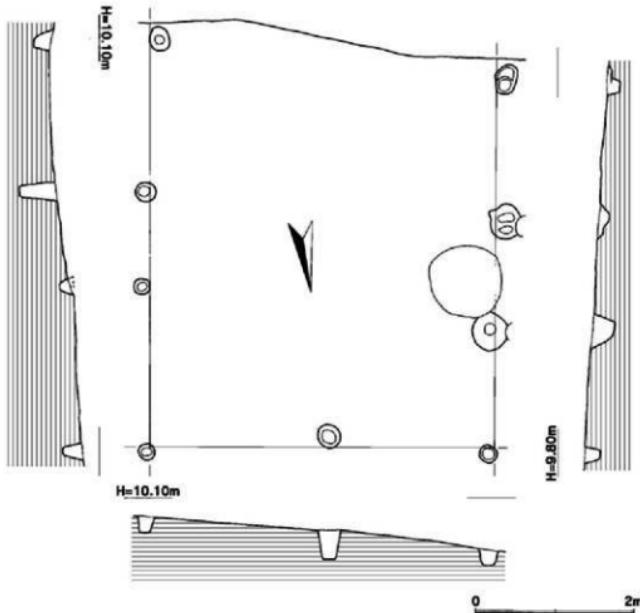


Fig. 7 SB104 実測図 (1 / 60)

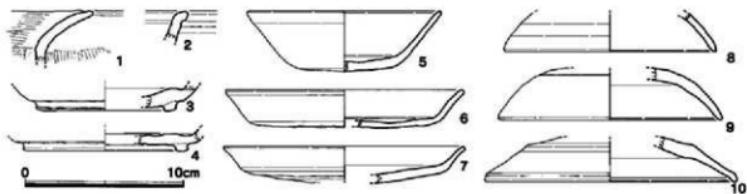


Fig. 8 挖立柱建物出土遺物実測図 (1 / 3)

口径は不明である。残存高3.3cmを測り、口縁部内面および胴部外表面はハケ、胴部内面には横方向にヘラ削り痕が観察される。2は鉢か。口縁部の小片で、残存高1.9cmを測る。焼成はきわめて良好である。3は高台付き壺である。底部の小片で底径10cmを測る(反転復元)。内面は見込みまで回転ナデ調整である。6は皿である。同一建物の複数の柱穴から出土した破片が接合した。小片だが口径14.8cm・器高2.4cmに復元できた。8は蓋である。口縁部の小片で口径13.2cmを測る(反転復元)。器表全体が磨滅しており調整は不明。いずれも胎土は精良で焼成は良好である。

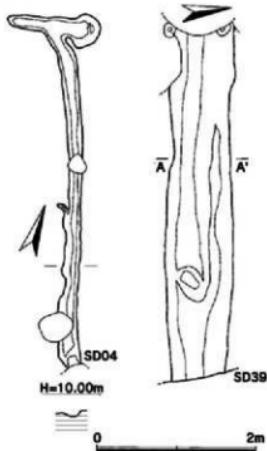


Fig. 9 SD04・39 実測図 (1 / 60)

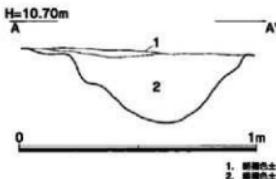


Fig. 10 SD39 土層断面実測図 (1 / 20)

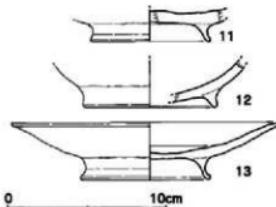


Fig. 11 溝出土遺物実測図 (1 / 3)

SB102 (Fig. 6) 調査区北部にて検出した。SB101・103と重複する 2×2 間以上の側柱建物である。東側3間西2間と間数が合わないが、柱痕跡を持つ柱穴でそれが柱筋に乗ることからSB102を含めた。さらに東側に東西方向の柱筋に乗る複数の柱穴が検出されており、これらと併せ南東方向に突出部を有する建物になる可能性があるが、現場では確認できなかった。柱穴の平面形は不整な円形で径約0.2～0.4mを測り、深さは0.1～0.5mを測る。深さには特に傾向は認められず、まちまちである。埋土は暗灰色でシルト質である。柱間は東側柱筋中央の0.9mを除き、1.5～1.9mを測る。

出土遺物 (Fig. 8) 5は、須恵器である。壺の小片で、口径14.0cm・器高3.8cmに復元できた。外底面にヘラ切り痕が観察される。胎土は精良で焼成は良好である。

SB103 (Fig. 6) 調査区北部にて検出した。SB101・102と重複し溝SD04を切る。既存建物の基礎に北側柱筋の柱穴を切られるが、2間×2間の総柱建物と推測される。柱穴は不整円形を呈し、深さは中央の柱穴のみ0.1mと浅いが、概ね0.4～0.5mの範囲に収まる。埋土はSB101・102と色調は類似するが異なる土質である。柱間は南北方向中央の柱筋が西に偏しているため1.6～2.1mと開きが大きい。

出土遺物 (Fig. 8) いずれも須恵器である。4は高台付き壺の小片である。底径10.0cmに復元できた。外底面にはヘラ切りの跡が残る。9は蓋の小片である。土師質だが外面調整は須恵器のそれであるため須恵器とした。口径13.8cmを測る(反転復元)。天井部外面に回転ヘラ削りが施される。いずれも胎土は精良で焼成は良好である。

SB104 (Fig. 7) 調査区南部にて検出した。SB100・102・103と重複する。南側の桁行が調査区外に伸びるため全容は不明だが、南北方向に長軸を有する2間×3間以上の側柱建物である。柱穴の平面形は不整円形で、径約0.2～0.4m、深さ0.15～0.3mを測る。埋土は灰褐色～暗褐色を呈する。柱痕跡は検出できなかった。他の建物に比べ柱穴の規模が小さく、中世まで時期が下る可能性もある。柱間は柱穴の中心同士を計測して1.3～2.0mを測る。遺物は、弥生土器の小片が出土した。

②溝 (SD)

SD04 (Fig.9) 調査区北西部にて検出した。掘立柱建物SB103に切られる。直線的な溝で長軸を南北方向に向かう。北端は西方に屈曲する。南端はピットに切られるが、本来はさらに南方に延び、不整なL字状を呈していたと思われる。断面は逆台形で、埋土は暗灰色土の単層である。深さ0.1m前後と浅いが、これは整地層除去去後に検出したためで、この溝は整地層の上から掘り込まれ、もっと深かったと推定される。おそらく掘立柱建物群または推定炉跡と関わりのある溝と推測されるが、関係について現場では確認できなかった。

遺物は、弥生土器の小片が出土した。

SD39 (Fig.9) 調査区北東部にて検出した東西方向に直線的に伸びる溝である。東を削平され、西を既存建物の基礎で破壊されており、残存長4.3mを測る。底面に一部テラス状の段やピット状のくぼみを有するが、断面形状は概ね逆カマボコ状となる。

埋土の堆積状況をFig.10に示す。すべて自然地盤で流水を発わせる堆積はない。Fig.11に示す遺物から時期は掘立柱建物群より新しいと思われる。

出土遺物 (Fig.11)

11は土師器碗である。底部の小片で、底径7.4cmに復元できた。12は黒色土器B類碗である。底部の小片で、底径8.1cmに復元できた。内面と外底面が黒化する。13は土師器高台付き皿の小片である。口径16.2cm・器高3.6cm・底径7.2cmに復元できた。いずれの土器も器表の磨減が著しく外側調整は不明である。

③土壤 (SK)

SK84 (Fig.12) 調査区南東部で検出した。長軸を東西方向に持ち平面形は不整長方形を呈する。遺物包含層の上面から掘り込まれると見られるが、深さ0.1~0.15mと浅く壁面・底面とも境界が不明瞭である。出土遺物から弥生時代の造構と推測されるが、ほかに弥生時代の造構は検出されなかった。包含層の堆積の単位を造構と認めたものの可能性があるが、現場では確認できなかつたため不整長

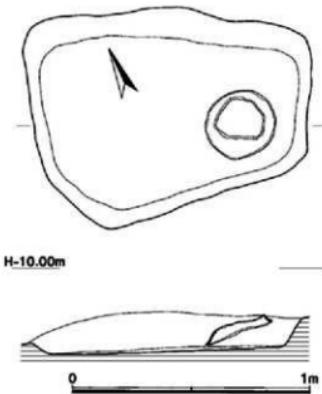


Fig.12 SK84 実測図 (1 / 20)

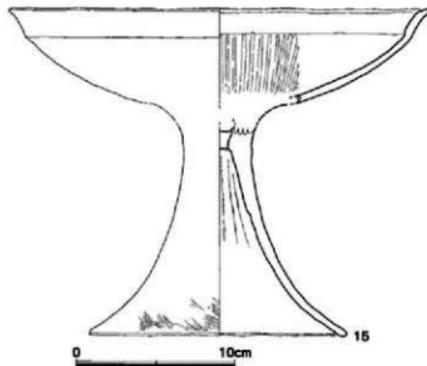


Fig.13 SK84 出土弥生土器実測図 (1 / 3)

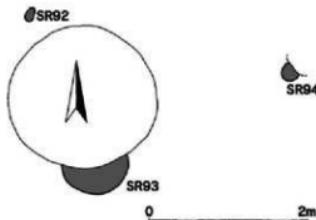


Fig. 14 SR92・93・94 実測図 (1 / 60)

④炉跡 (SR)

調査区北部にて地山の砂礫層が被熱し赤変する地点が3箇所検出された。SR94は掘立柱建物SB102の柱穴に切られる。炉の上部が削平された後、下部の被熱部が残存した物と推測し、炉跡とした。いずれの被熱部にも埋り込み等明確な人為的造作は認められなかった。中央のSR93について断ち割ったところ、検出面から深さ7cm程度まで被熱により硬化し、以下深さ15cmまで被熱による土質・土色の変化は漸移的に弱くなる。いずれの被熱部からも遺物は出土しなかったが、SR92の直近に検出されたピットSP87・88から少量ながら炉壁が付着した鉄滓が出土している。これらが炉跡に関係する遺物とすれば製鉄炉の可能性が出てくるだろう。

⑤ピット・調査区壁面出土の遺物

掘立柱建物を構成しないピット・柱穴および調査区壁面から出土した遺物をFig.15に示す。なお、調査区壁面出土の遺物には整地層の遺物が含まれるが、取り上げ時のミスで遺物が混入し、明確に分類できなかった。

(Fig.15) 18は、弥生土器壺である。SP79出土。口縁部から胴部にかけての小片で、口径20.4cmに復元できる。胴部下半は磨滅し調整は不明である。16・17は、須恵器である。16は高台付き壺の小片で、底径8.4cmに復元できる。内面見込みは不定方向のナデが施される。17は蓋の小片である。口径18.2cmを測る(反転復元)。天井部外面に円形に色調差がみられ、重ね焼きの痕跡と推測される。

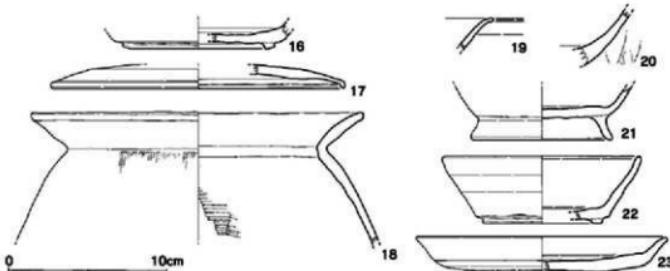


Fig. 15 ピット・調査区壁面出土物実測図 (1 / 3)

方形の土壙と暫定的に報告する。

造構の南東部に底面から浮いた状態で弥生土器壺が出土した。実測図をFig.13に示す。脚部と坪部が出土したが直接は接合しなかった。しかし胎土・焼成の度合いから同一個体と推測されるため図のように復元した。破片は6割程度残存し脚部に穿孔はない。坪部径26.1cm・脚部径15.6cmに復元できた。坪部内面に上下方向の疎なヘラミガキがみられる。

19は、越州窯系青磁碗である。口縁部の小片で、外面に薄く透明感のない灰緑色の釉が施される。20は、龍泉窯系青磁碗である。胴部の小片で、外面に蓮弁文がみられる。21は、土師器碗の小片である。底径8.6cmに復元できる。22・23は、須恵器である。22は高台付き壺の小片で、口径12.2cm・器高4.2cm・底径7.2cmに復元できる。23は皿の小片で、口径15.0cmに復元できる。

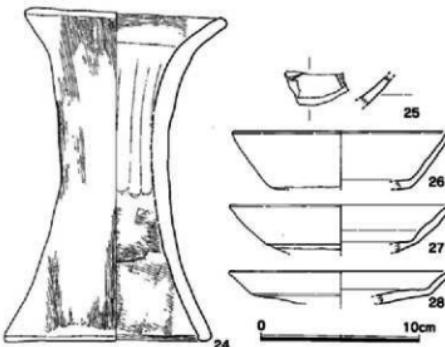


Fig. 16 整地層出土遺物実測図（1/3）

⑥整地層および遺物包含層

調査区北東部を除く部分で整地層および遺物包含層を検出した。土層断面図を参照できるため詳しい内容は調査概要の方に記載した。ここでは出土遺物について説明を行う。

整地層の遺物 (Fig. 16) 24は弥生土器台である。下層の遺物包含層からの混入と推測される。ほぼ丸形で口径11.9cm・器高21.1cm

・底径12.0cmを測る。25は龍泉窯系青磁碗である。上層の盛り土からの混入か。胴部の小片で、外面に刻花文を有する。26～28は須恵器である。26・27は壺の小片で、26は口径13.4cm、27は口径13.8cmに復元できる。28は皿の小片。口径13.8cmに復元できる。

遺物包含層の遺物 (Fig. 17) 29は玄武岩製磨石斧である。先端のみ残存する破片で研磨は刃部のみに行われる。残存長8.5cm、重量223gを測る。30は磨石である。砂岩質の円盤を用い側邊の一部に擦痕を有する。長径11.8cm・重量1150gを測る。

(Fig. 18) すべて弥生土器である。調査地の土質によるものか器壁が荒れており調整は不明瞭である。31は小形の鉢である。8割程度残存し口径11.2cmを測る。33は高壺である。残存高14.1cmを測る。32・34～36は器台である。32は外面にタタキ目が残る。34は下部を欠損する。35は下部にタタキ目が残る。36は全体を復元できた。タタキのうちハケで外面のタタキ目を消している。37～40は底部の破片である。39は壺、それ以外は壺と推測される。いずれも底面は丸みを帯び、38は尖り底に近い。いずれも全体の形状がわかる破片ではない。41は鉢である。口縁部を欠損するが、体部半ばから外反し口縁部は大きく開く形状となろう。42は高壺の壺部と推測される小片である。口径23.0cmに復元できた。43・44は壺である。いずれも口縁部がくの字に屈曲する複合口縁壺である。43は口唇部が外反する小片で口径15.6cmに復元できる。44は頸部と胴部の境界に1条の断面三角形の突帯を有する。口径25.6cmに復元できた。いずれの土器も胎土は精良で焼成は良好である。

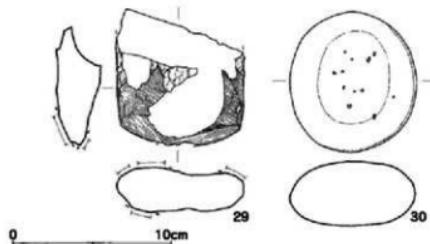


Fig. 17 遺物包含層出土石器実測図（1/3）

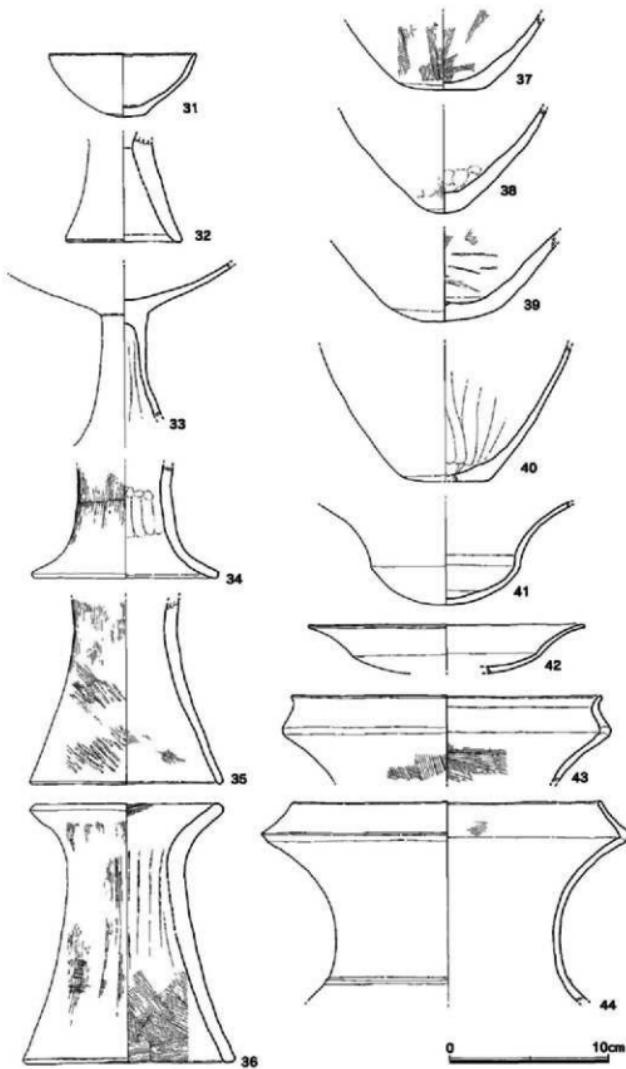


Fig. 18 遺物包含層出土弥生土器実測図 (1 / 3)

第4章　まとめ

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物6棟、炉跡3、溝2条、ピットである。いずれも遺物包含層を切る。弥生時代後期中葉～後半頃の遺物を含む遺物包含層より古い時期となる遺構は検出できなかった。整地層は複数の層からなり、整地を繰り返しながら掘立柱建物を建て替えたと推測される。建物は2間×2間または2間×3間で、いずれも整地層を切って構築されている。3棟切り合うなど重複が多い。平安時代の掘立柱建物群と推測される。炉跡とみられる被熱部は掘立柱建物と重複して検出される。ここではまとめとして、掘立柱建物と溝、炉跡の関係について若干の所見を記したい。

掘立柱建物は6棟検出した。建物として拾いきれなかった柱穴の中にも深く柱痕跡が観察されたものがあり、本来はさらに多くの建物があったと推測される。掘立柱建物の規模は1×2間、2×2間、2×3間、もしくは2×3間以上である。周辺の掘立柱建物から、1×2間の建物は2×2間の純柱建物になると推測される。これらの建物は重複関係や互いの位置から少なくとも4期に分けて考えることができる。重複関係から2×2間と2×3間の建物は併存しないとみられ、2つの規模の建物間で先後関係があると推測される。直接柱穴が切り合わず、遺物は出土量が少量であったためどちらのタイプの建物が先行したかは確認できない。しかし少ない遺物からは明確な時期差は見えてこない。掘立柱建物が築かれた時期は概ね9世紀初頭～前半頃の範囲に収まると推測される。

溝は2条検出した。SD04は等高線に概ね平行に検出され、北端には等高線に直交する方向の溝が付属する。現場で切り合はれ観察されず、同一の溝であると判断した。この溝SD04は掘立柱建物SB101・SB103に切られ、掘立柱建物に先行する遺構であることがわかる。時期は遺物僅少のためよくわからないが、掘立柱建物の時期からそう遡るものではないと推測される。現場では掘立柱建物の雨落ち溝またはテラス状の造成段の排水溝の可能性を想定し、この溝に平行な軸を持つ建物を探したが、見つけることができなかった。強いていえば掘立柱建物SB105が溝SD04とセットになる可能性を有するが、間隔が開きすぎ、互いの主軸は平行とはいえずその可能性は低い。溝SD39は、等高線に直交する方向に検出された。直線的に掘削され、流水の痕跡はない。方向は掘立柱建物SB103の主軸に近いが、出土遺物から溝SD39の時期は9世紀中葉～後半頃と見られるので、この2遺構が併存していたとは考えにくい。検出状況から何らかの区画溝の可能性があるが、何を区画していたのかは現場では確認できなかった。大正末～昭和初頃作成の地形図からは、調査地が略方形の段状に造成された部分に位置することがわかる。これが古代まで遡る造成の痕跡とすれば、溝SD39はこの造成段の縁辺を囲繞していたのかもしれない。

炉跡は3基検出した。基盤層の黄褐色砂礫層が不整円形に被熱していることから炉跡としたが、根拠に乏しいくらいはある。当該部分は削平のためか整地層・遺物包含層とも検出されず、地山の被熱部分だけの検出であり、遺物は出土せず時期・上部構造は不明である。SR94は掘立柱建物SB102の柱穴に切られ、2×2間の建物に先行して炉が築かれたとみられる。掘立柱建物SB101は炉跡をすべて覆う位置に検出され、炉の覆い屋になる可能性がある。覆い屋とすれば、2×2間の建物は2×3間の建物より後出することになる。

掘立柱建物と溝、炉跡について現場で得た所見を述べてきた。建物と溝は時期に差がある。特にSD39は建物より後出する。掘立柱建物SB101については製鉄炉の覆い屋になる可能性があり、注目される。9世紀代の調査地周辺の状況を示唆する結果となつたが、調査面積は狭く、これらの遺構の性格は周囲の調査例の増加を俟って検討する必要があろう。

図 版
PLATES



1. 調査前状況（東より）



2. 作業状況（東より）



3. 調査区全景（東より）



1. 整地・遺物包含層除去後全景(東より)



2. 調査区南壁土層断面（北より）



3. 挖立柱建物 SB101・102・103・105
(東より)



1. 挖立柱建物 SB100・104（東より）



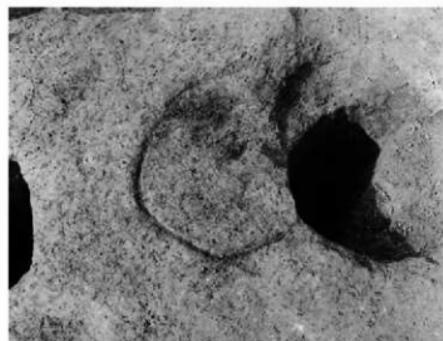
2. 溝 SD39土層断面（西より）



3. 土坡 SK84（南より）



1. 炉跡 SR93(南より)



2. 炉跡 SR94(南より)



3. SR93土層断面(西より)

報告書抄録

ふりがな	いいくらえーいせき			
書名	飯倉A遺跡			
副書名	第2次調査報告			
卷次	2			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	921			
編著者名	阿部 泰之			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	福岡市中央区天神1-8-1			
発行年月日	2007年3月30日			
調査期間	2006年1月13日～2006年2月17日			
調査面積	235.6m ²			
調査原因	共同住宅新築			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 (度分秒)	東経 (世界測地系)
いいくらえーいせき 飯倉A遺跡	福岡県福岡市早良区 飯倉5-191-1	40137 避防番号	33°33'50"	130°21'17"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
飯倉A遺跡	集落	弥生 古代 中世	弥生/土墳1古 代/掘立柱建物 6・溝2・が跡3 磁器	平安期の焼地層 を伴う掘立柱建 物群
要約	今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物6棟、伊勢3、溝2条、ピットである。いずれも遺物 包含層を切る、弥生時代後期中葉～後半葉の遺物を含む遺物包含層より古い時期となる遺構は検出できなかつた。焼地層は複数の層からなり、蒸焼を繰り返しながら掘立柱建物を建て替えたと推測される。 3棟切り合うなど重複が多い。平安時代の掘立柱建物群と推測される。			

飯倉A遺跡2
—第2次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第921集
平成19年3月30日
発行 福岡市教育委員会 福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 田堀印刷有限会社 福岡市中央区草香江1丁目8番24号